

伝統文化（古典）における「習得・活用」の授業開発 —「竹取物語」のテキスト形式をめぐって—

佐藤 洋一* 有田 弘樹**

*教職実践講座

**大学院学生

How to Develop the Classes of Classical Literature (One of Japanese Traditional Culture) Where Pupils Today Can Acquire Some Skills and Apply Them to Their Learning —A Study on ‘Takatori Monogatari’ and Styles of Literary Works—

Yoichi SATO* and Hiroki ARITA**

*Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

一 伝統文化の重視と今日的な教育実践課題

戦後約60年ぶりに改正された新教育基本法・学校教育法では「伝統と文化」の尊重が明記され、義務教育の目標・学力の3要素等が明示された（習得・活用・探究、主体的な学びの意欲と習慣化等）。

これらを受け、新学習指導要領（国語科）では新たに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設された。この授業化をめぐり、小学校から中・高校と生涯にわたって「伝統的な言語文化」に「親しむ」態度や「読む、書く、話す聞く学力」との学習と相互に関連させた構造的・系統的な授業・指導技術、教材・評価開発等が緊急の実践課題として求められている（注1）。

一方で、こうした学習は教育基本法改正の経緯や「愛国心」「道德教育の重視」等との関連から、国家主義的な古典教育の復活、時代によって創られた日本の伝統や特定の価値観、古典の押しつけ等との批判が一部では語られている。教育基本法改正についての様々な立場からの賛否・論争や解釈も語られている（注2～4）。

二 伝統文化・「習得・活用」の授業開発

—「竹取物語」のテキスト形式をめぐって—

本稿は、以下1～8の研究構想の中で「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の何をどこまで教えるか、小中学校（高校）との学びの系統性や評価（規準・基準）、授業・評価開発について「竹取

物語」の授業開発（学習シート）や古典テキスト（表現）形式の試案等を例に論ずるものである。

- 1、戦後約60年ぶりに改正された新教育基本法・学校教育法他における伝統文化の重視と、国語科「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の扱いについての理論的な提言を、いくつかの観点から行う。
- 2、「言語活動の充実」と「伝統と文化」の尊重、全教科の基礎・基本（習得）との関係等、各教科の特性を踏まえながら、それらがどのように社会・英語・理科・家庭科・図工（美術）・体育等の教科の授業化と関わるのかという視野から検討する。
- 3、「生きる力」・課題解決能力につながる活用の学力、すなわち「思考・判断・表現力等の学力」の育成という新学習指導要領での重要実践課題の観点から検討する（習得・活用・探究と伝統的な言語文化）。
- 4、日本人としてのアイデンティティ（存在の固有性や根拠、独自性）の獲得と、言語・文化伝統・感性、異文化社会との豊かな関係等の関係から検討する。
- 5、文化的な価値目標（及び技能目標・言語技術）の「枠組み」から国語科学習の目的・評価・指導過程・授業技術等を構造的にとらえ直す契機とする（「言語の教育」（言語技術）という立場からの検討と提案）。
- 6、目標・評価を明確にした「国語科古典授業・評価システム」の開発と提案。小中・高校までの「系統的な学習システム」の開発を通して、日本文化・日本人としてのアイデンティティや思考・発想形式等を見直し現代に活かすという観点からの授業開発を行う（注5）。
- 7、1000年以上前に書かれたとされる「竹取物語」は

世界的に優れた文学作品の一つであり、現代に生きる豊かな価値（普遍性・批評性）を持っている。新国語教科書では小学校5・6年、及び中学校でも教材化されている。本稿では言語技術の観点から実践的な授業モデル（学習モデル）の開発と提案を行う。

8、古典における「テキスト（表現）形式」の特性を明らかにするための試案を提示する。これにより、古典教材指導の中核と周辺、系統的な教材開発（単元構想、教科カリキュラム）等への視野が鮮明になる。同時に、これは論理的文章指導における「テキスト（表現）形式」である「説明・記録（観察）・報告・論説・評論・鑑賞・批評等」の位置を対比的に（重なりや相互性も）明らかにすることにもつながるはずである。

三 言語力と主体性、批評的精神を育てる

1、言語文化と国語科の役割の重要性

「言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値を持つもの」「古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能」、伝統や文化についての深い理解は「他者や社会との関係だけではなく、自己と対話しながら自分を深めていく上でも極めて重要」(新学習指導要領国語科解説等、注1)とも語られている。

国語科の役割については、言語力育成(国語科学習)＝文化・歴史、感受性や発想・思考・判断の基盤(型)を成すもの・・・文化や民族・歴史そのものであり、小学校低中学年から「古典等の暗唱による言葉の美しさやリズムの体感」「和歌・物語・俳諧、漢詩・漢文等の古典や物語、詩、伝記、民話等の近代以降の作品」に触れることが明記されている。

2、「文化的な価値目標」からの授業観・再考

民話（神話）や物語・日記・随筆・記録、あるいは伝記や故事成語等の「選択された言葉と構成・表現のスタイル（テキストの表現形式）」、年中行事や生活様式・季節への感受性や美意識等に込められた伝統的な意義や重要性を学ぶことは、言語と感性による自己・他者・異文化理解の基礎・基本である。

日本人の精神と思考の骨格、発想形式(型)等を創ってきた伝統的な言語文化を学ぶことは（平安朝に一つの成熟を迎えた）、過去への回帰や郷愁・知識教養主義ではなく、複雑な現代情報社会を生きる子どもたちに現代と未来を生きるための学力と日本文化・日本語の構造と位置、それらをどう解釈し自分の生き方に生かすかという主体的・批評的精神を鍛えることである。

これは言い換えると、文化的な価値目標（及び技能目標・言語技術）の枠組みから国語科学習の目的・評価・授業技術・指導過程等を構造的にとらえなおすことであり、国語科「技能目標と価値目標」の相克、「系

統的学力指導重視と人間性・社会性育成（スキルか生き方指導か）」といった戦後以降の、振子のように揺れてきた教育課題の実践的再構築の契機にもなることである。

四 言語の教育と「伝統的な言語文化」の枠組み

1、「文化的・歴史的な枠組み（垂直的思考）」設定

「教育内容に関する主な改善事項」(注1)で「伝統や文化に関する教育の充実」が示されたことは、これまでの言語教育に文化的・歴史的な価値目標の「枠組み」が設定されたことととらえることができる。

これまでの言語教育（国語科）でつける学力目標と評価観という面から見ると、「読む・書く・話す聞く、言語事項(言語の知識等)」の3領域1事項は各指導事項領域間の関連は重視されながらも、ややもすると「水平的並立的に」解釈・指導されてきている傾向が強い。今回の改訂国語科では言語教育を、いわば垂直的（歴史的文化的枠組み）にもとらえ直す枠組みに活かすことができる。戦後以降の言語教育、授業観・教育観等の内実と方法を再構築する一つのよい契機である。

2、三つの言語機能（言語レベル）と国語科学力

言語はコミュニケーションの方法や認識・思考形式であるとともに、アイデンティティそのものであり、それぞれの国や民族固有の伝統や文化・歴史の背景という厚みを持っている。国際化・グローバル化のなか、国語科指導だけでなく小学校の外国語教育（英語）での伝統文化重視、保健体育科における武道、社会科・地理分野における都道府県名の指導、家庭科・理科等での授業で、こうした「言語活動の充実」「伝統と文化」の尊重をどう授業化するのかが課題である（注5）。

例えば、外国語学習でコミュニケーションスキルや発音・文法等は熟達したが、伝える内容（自分の考え・解釈・判断力・主張等）が希薄なままでは新課程に対応した学習とはいえない。言語の機能論説は多いが、ここでは大きく三つの機能から考えることにしたい。

- (1) 言語は自己と他者（世界・情報）とのコミュニケーション技術。言語と非言語情報の理解、それらの習得・活用、探究の学習モデルが必要である。
- (2) 認識や思考・判断力・創造・発想・論理等の方法や形式としての言語。複雑で多様な「情報」を主体的に判断・選択、構成・発信、批評する言語技術の授業モデル学習が必要である。
- (3) 民族や国家、自己の発想や思考形式（型）、伝統・歴史・アイデンティティそのものとしての言語。言語や表現形式（テキスト形式）・コンテキスト・コード、個人の思いや立場、感受性や生き方、民族・国家の伝統や歴史・文化認識力に関わる指導。

これまでは、(1)のような「伝え合う」活動や断片的な技術が強調され、その内実を支える(2・3)のよう

な国語科学習は十分ではなかった。例えば、「自分の考え・解釈を持つ」「論理的に説明・要約・引用できる」「条件に合わせてレポート（報告）や論文、批評等がまとめられる・評価改善できる」等の学習と評価、あるいは「発表や報告のときの判断力や感受性（感性・発想の評価）、説明力の質・特質の評価」といった主体的な判断力や批評能力に関わる学力の面、さらにはこうしたことを生かした読書力等につながる系統的な学力育成、授業開発、授業技術等が十分ではなかった傾向がある（注3・5）。

3、「伝統的な言語文化」国語科授業開発への視点

新学習指導要領では「伝統的な言語文化」の対象として「昔話や神話、伝承など」（1・2年）「易しい文語調の短歌や俳句」「ことわざや慣用句、故事成語など」（3・4年）「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章」「古典について解説した文章」（5・6年）「文語のきまりや訓読の仕方」「古文や漢文」（中学1～3年）等が提示されている。これらの内容を踏まえながら次のような枠組みで、各学年で螺旋的に繰り返し、シンプルで系統的な授業づくりと評価を考える必要がある。

- (1) 漢字（語彙）と平仮名は日本人の思考と判断・表現を形づくる基礎。古語、大和言葉、文法等の授業。
- (2) 敬語や言葉使い（言葉のきまり）は人間関係の距離の「正確な」認識と判断力、それにふさわしい言語力（コミュニケーション技術）の学習。述語に判断を表現する日本語の特質、社会・人間関係の中の言語表現の特質を踏まえた授業開発の工夫が必要。
- (3) 諺・故事成語・慣用句・漢詩文等は日本人の精神の骨格・思考や発想の型を形成した「漢文脈の伝統」＝言語文化と思考方式等を学ぶこと。揭示やクイズ形式、自分の生活経験を語る報告・解釈等で楽しい学習にすると効果的である。
- (4) 平安朝に一つの成熟を向かえた古典（物語や随筆、日記、記録・ノンフィクション等）の学習は日本人の感受性の型、女性作者による表現技術の拡大（＝和文脈の伝統）、記録・随筆の方法理解等が重要である。（授業モデルでシンプルに）
- (5) 民話や伝承・神話（世界の民族の知恵と生き方、記録）。民族の知恵、記録の読み方の授業モデルを。
- (6) これまでの文学教材・説明文教材等の学習が「伝統的な言語文化」の学習に生きる習得・活用力へ。重なる部分と重ならない部分の明確化で系統的指導と評価、関連を生かした授業や読書力育成ができる。

五 「伝統的な言語文化」を活かす言語技術

（資料1～3及び、授業開発・学習シートを参照）

国語科における「伝統的な言語文化」の言語技術は漢字や語彙力・敬語等「国語の特質に関する事項」と

セットで考える必要があるが、ここでは古文の言語技術に絞りポイントを5点提示する。何より楽しく論理的に教え、批評的に「自分の考え」を持たせることが重要である。

1、言語力・言語活動・学びの系統性の明確化

何を教えるのか（到達目標・評価基準）、児童生徒はどうなればいいのか、特に質的評価を明確にし「言語活動」でつける学力の評価規準（基準）を明確化する。学年・発達段階を考慮した授業開発・学習シート等。

2、音読の技術（範読・斉読・指名読み等）（注6）

古典（古文、漢詩・漢文）は主に音読で伝わった歴史的経緯がある（『源氏物語』音読説）。音読のリズムは時代の価値観や生活様式、当時の日本人の思考の型・発想を示すもので、範読による音読指導が重要である。範読の重視で音声・リズムによる思考・発想の型の学習が可能である。例えば、諺や慣用句・いろは歌、和歌・俳諧等の五七調・七五調と日本語のリズム、枕草子・平家物語や方丈記・漢詩等の冒頭・表現スタイルと構成等である。

3、暗唱・朗読の技術と解釈（注7）

作品の文化的歴史的な意義、現代に通ずる価値のポイント、テキスト形式の特質を踏まえた音読・暗唱（朗読）がより効果的である。例えば、「枕草子」（春はあけぼの）や「平家物語」冒頭等である（詳細は省略）。

4、古文の魅力を「論理的に」教える五つのポイント

古文の魅力と学び方を楽しくシンプルに教え、生活経験や知識・各教科学習と結びつけて「自分の考え・解釈」をもたせるためには、音読や暗唱以外に、伝承や民話・小説（物語）・随筆・論理的文章・記録の読み方等（基礎・基本の「習得」）がわかっているとより効果的である。古文は現代文の読み方を応用した指導が可能である（注5）。

(1) テーマ・構成・中心人物、優れた表現等の読み方等（習得型学習。基礎・基本モデル学習）

基礎学習では「竹取物語クイズ」等の形で古典語の特色・貴族の一生・結婚と幸福観等を扱う。基本モデル学習では状況設定の方法・場面構成・中心人物の変化（はじめと終わり、そのきっかけ）・テーマの意義や解釈の仕方・優れた表現の読み方（描写・語り、記録の技術、象徴的なイメージ）等のポイントを扱う。

(2) 省略されている要素の選択と指導（習得型学習）

- ①時代の常識的な価値観の指導。当時の人々の生き方や考え方や男女の一生・願いや理想・信仰等。
- ②当時の美意識・感性の指導。和歌や随筆等では、表現の前提（その時代の常識的な価値観）が書かれていない構造のため、これらと対比しないと作者・筆者のメッセージの意義や発見の新しさ・個性等が理解しにくくなる。
- ③テキスト形式・表現を支えている背景（身分社会制度や地位、職業、教養等の意味）。出自や血筋

資料2 「伝統文化」（古文）の授業開発・学習シートー「竹取物語」（中学校編）ー

楽しくわかる古文（古文）の学習

中学一年 組 番 氏名

永遠な魂のうつくし（純粋さ）、へのあがれど、人間の「愚かさ・欲」への批評
「竹取物語」のおもしろさと、古文が楽しくわかる語が方の「習得・学習」

ステップ1
なぜ、古文を学ぶといけないの？
使わないのに？ 昔の話を？

みんなは、実際に使う必要がないのに、「どうして古文を勉強しないといけないの？」（学習の目的とか学び方・評価）「どうなればいいのか？」などがわからない？と疑問を感じたりしていませんか？（ただの教養のため？ 知ってみたい方がいるから？）古文（漢文）の世界の深い魅力を知り、学び方を楽しく知ることとは、自分の「言葉の世界を豊かにする」ためにも、これからの「日本人としての生き方」や「自分らしい生き方」を創るためにもとても大切なことです。

1、日本人の発想の仕方、感性のルーツ、日本語の仕組みの歴史的な変化を知るため。
古文の学習をするのは、日本語の歴史的な変化や仕組みなどを知ることができます。これは、日本人としての「自己発見」にもつながっていきます。

2、今の日本人の「もの感じ方・考え方」の原型を知るため。
今の私たち（日本人）にとって「かわいいものは？」「きれいなものは？」「いつの季節が一番美しい？」などなど……実は「枕草子」や「源氏物語」などが女性たちによって書かれた一〇〇年前の「平安朝時代」に、今の日本人の感じ方や考え方の原型ができました。また、詩歌だけでなく、散文（物語・小説・日記・随筆など）で私たちの心のくわしい表現技術、恋愛心理・死別や別れのかなしみ・自然の美しさを確立させたのも、「平安朝時代」の女性たちの文学や記録・日記なのです。

3、世界の文学・記録の中でも際立つ優れた作品がたくさんある。
イギリス・フランスなどの西欧よりも早く、そして優れた文学・記録などが書かれたことは、日本の誇るべきことで世界的にもとても貴重なことです。例えば……
『竹取物語』九〇〇年頃……古代に書かれた近代小説的な作品
『伊勢物語』九五〇年頃……和歌の教科書（姫君たちのテキスト）
『源氏物語』一〇〇〇年頃……深い恋愛心理の真実を描いた宮廷小説
『平家物語』一二〇〇年頃……時代の価値観の中で懸命に生きる人間の輝き（瞬間）と「生の無常」「徒然草」一三三〇年頃……人生の深く鋭い考察を集めた随筆

4、古典」とは「大人」が本当におもしろいと感じてきたもの。
古典は時代が変わっても「大人たち」に読みつがれてきた作品です。人々の楽しさや厳しさを、かなしみを知っている人たちが読んで、「ああ本当におもしろいな」と思ったものだけが残りまし。

みんなにとっては、言葉・文法とかが面倒に思うこともあるかもしれませんが、古文を読む楽しさを知り口語訳でどんどん読んでみましょう。中学生（小学生）にも「なるほど」と思う世界が、きっとたくさんあるはずですよ。

ステップ2
「古文（竹取物語）をしよう！
平安朝時代の文化・言葉の例」

1、京都に都があった平安時代（七九四～一九二）の約四〇〇年間は、帝・みかどを頂点とする貴族社会でした。京都中心の狭い社会では使われる言葉も独特の風味をもつて使われていました。例えば、「世界」といえば「京都中」のことを意味し、西欧やインドとかは含んでいません。

また、「花」といえば奈良時代では「梅」のことです。これは中国の影響です。しかし、平安時代には「花」といえば「桜」を示すようになりました。

では、「幸」は？ 「山」は？ 【狭い社会・平安時代の言葉】

・寺……金閣寺 法隆寺 三井寺 山寺
・山……小倉山 富士山 比叡山（延暦寺）

2、姫君たち（女性たち）の結婚適齢年齢は？
【女性の一生・結婚と幸福】

(1) 八九歳
(2) 一一・一三歳
(3) 一七・一九歳
(4) 二一・二四歳

※平安時代の姫君たち（女性たち）は何を幸福と思い、恋愛や結婚にどんなことを願っていたのでしょうか？
※今の私たちと同じく、ちがうところを比べてみるとおもしろいですね。

3、平安時代の「美人」の条件は？（時代背景と価値観の違い）

(1) 長い髪？ ショートカットの髪？ 髪の色は？
(2) 顔（お）の小さな小顔？ 下ぶくれのふっくら顔？
(3) 細い・重目の眼？ ぱっちりした二重の眼？
(4) 白くきれいな歯？ 黒く塗った歯？
(5) ぱおとした眉？ 柳型に整えた眉？

4、金（金）（金）（金）の意味は？（社会背景と言葉の意味）

(1) 耐える
(2) 結婚する
(3) 手紙を出す
(4) 憎（にく）む

※「見る」はどんな意味かな？
※どうしてこういう漢字が生まれたのかな？
（今と同じものも多いんだけど……）

ステップ3
竹取物語って要するにどんな話なの？
「かぐや姫の物語……」

1、竹取物語のストーリー（あらすじ）

月の世界から地上に降られた「かぐや姫」は、竹取の翁（おきな）と通（とお）おうな（大切に育てられ、五人の貴公子と帝の求婚をも断り、満月の夜、迎えに来た月の使者とともに月の世界に帰って行く物語）

◎こんな疑問がもてたら、とてもすばらしいなあ！

☆ヒント……古代では「竹」は神事に使われてきた。生命力、霊力など神秘的な力があるとされていたのです！

(2) なぜ、地上の世界に降ったのか？ 地球侵略のためか？
☆ヒント……ストーリーを全部読むと書いてある！

(3) 帝（みかど）というあこがれの人の求婚まで断ったのはなぜだろう？
☆帝（みかど）……当時の身分社会で最高の身分・教養もある人。姫君によつては帝と結婚することが、女性の最高の幸福だったのです！

(4) 「五人の貴公子」は何のために登場したの？ 男の愚かさ？

(5) なぜ、かぐや姫は「月の世界」に帰ったの？
☆地上ですと暮らしていたらどうなっただろう？

(6) 九〇〇年代の人にとつての「月の世界」って？

2 「竹取物語」のテーマ（主題）は、今でも不明なものです。
先生は、このように考えています。（これは一つの見方です）

①「永遠な」美しさ（心と魂の純粋さ）へのあこがれ
②人間の欲望への「批評」（心身より地味な名譽・金銭だけだけが大事だという考え方への「批評」）

他にも、「男女の恋愛（結婚）説」、「当時の政治（社会）体制批判説」、「世間的な欲求を求め心とそれを越えたい生きている価値など、いろいろのテーマ」を考えています。

みんなも、ぜひ「自分なりのテーマ」を考えてみよう。

3、参考までに知っておくといひです！
「竹取物語」……別名「かぐや姫の物語」。
平安時代前期（九一〇年以前）の物語で、作者未詳、最古の物語。
※源氏物語が物語のいきはじめの祖（おや）と「源氏物語」（「源氏」の巻）と語って、その小説的な価値を高く評価しました。

ステップ4
「竹取物語」をしよう！
「楽しながらやってみよう」

1、かぐや姫は、どこで見つかった？ 【人物設定の方法】

(1) かばちやの中
(2) 岩石の隙間
(3) 茄子（なす）の畑
(4) 竹の筒の中
(5) ドラえもんポケットの中

※どうしてこういうところかなのかな？

2、はじめのかぐや姫の大きさは？ 【人物のはじめ】

(1) 三〇センチ（二尺ばかり）
(2) 一八〇センチ（六尺ばかり）
(3) 一〇センチ（三寸ばかり）

※その後、どれくらいの期間で大人（の大きさ）になったのかな？
※「数字」も物語では大切ですよ！キリスト教世界では、十二・十三・金曜日……とか。

3、「なま竹の」かぐや姫」と名付けられたのは、なぜ？ 【命名とその意味】

(1) 家具を創るのが上手で、給夫婦のおかげで裕福になったから
(2) 光り輝くように美しく（実際、光が満ちているよう）
(3) その輝きで悪魔や病魔を退散させる不思議な魔力があったから
(4) 眼力（めぢから）が強くこの世の女性とは思えない雰囲気から

4、求婚者の最終選考に残ったのは「五人の貴公子」。
彼らは「身分（階級・高貴順）」に現れて、かぐや姫の難題を解決できず、結局は、かぐや姫に嘘（うそ）まかしを見破られ求婚に失敗するように語られている。次の五人を、登場した順番に（身分の高い方から）並べかえてみよう。「エピソード・事件の構成」

A 大納言（だいなごん） 大友御幸（おとものみゆき）
B 庫持（くらもち）の皇子（みこ）
C 中納言（ちゅうなごん） 石上麻呂足（いそのかみまろたり）
D 石作（いしづくり）の皇子（みこ）
E 右大臣（うだいに） 阿部御主人（あべのみうし）

5、かぐや姫は、八月十五日（満月の夜）に月の世界に帰らなければならぬ。月の都の人々と翁に語る。また、自分の出生の秘密も語っている。次の中で正しいものを○選ぼう。 【人物設定とその変化】

(1) 月の世界に実の両親がいる。
(2) 月の世界では孤児である。
(3) 月の世界の記憶は全くない。
(4) 月の世界は楽しく自由である。

6、かぐや姫は、地上の竹取の翁のもとに帰ってきたのはなぜか？
月の都の使者はどう語っているか、次の中から二つ選ぼう。 【星間関係と設定・テーマ】

(1) かぐや姫は月の世界で罪を犯したので、地上につかわされた。
(2) かぐや姫の希望で地上世界を選び、やつてきた。
(3) かぐや姫は地上の人々に美の怖さを伝えるためにつかわされた。
(4) 竹取の翁が竹を毎日取って、環境に悪影響を与えたため。
(5) 竹取の翁が善行（ぜんこう）良い行いを積んだので派遣した。
(6) 竹取の翁が欲望のため大切なものを失うことに気づかせるため。

スズキ

古文のわかる読み方を身につけよう！
「竹取物語」を例に中高校編

みなは中学・高校生ですが、高校に行っても使えるように、今のうちから少しずつ学習の方法を身につけていきましょ。はじめはすべてできなくてもいいです。一つか二つでいいだけでも構いません。

1. 「古文の世界のおもしろさ」を知るポイント「三項目」！

(1) 繰り返し「音読」しよう。

① テーマ（主題）、② 場面構成、③ 中心人物の変化（初めと終わりでどう変わるか）、の三つを意識して読めるとすばらしい。

(2) 「口語訳」でいかに楽しんで読む。

小説（物語）とか報告（記録）とか、自分の好きな「古典」を一つもてるといいです。（感想・意見がいたらもつてこい！）

(3) 「音読」を教えるもつてから読む。

古文には、語られていなかったり、省略されている「背景（その時代の常識的な価値観など）」があります。まずは「古典特有の知識」を少しだけ理解してから読むと、「古文の世界のおもしろさ」がより深まって、楽しく読めます。

① 時代の常識的な価値観

……その時代を生きた人々の考え方や男女の一生、願いや理想、信仰など。

② 美意識 ……何を美しい、かわい、憎らしい、素敵かなど。

③ 身分制社会 ……帝を頂点とした階級社会、生まれや籍の血筋で一生のほとんどが決まる社会。

（例）光源氏、清少納言、兼好法師など

2. 練習——持統天皇の「常識」への挑戦と優れた表現力！

春過ぎて夏来（きた）るらし白たえの衣干したり 天の香具山（持統天皇 『万葉集』）

（訳）春が過ぎて、この大和の国にも爽やかな夏（初夏）が来るらしい。真っ白な衣が、緑したるように美しい香具山を背景に干してあるから。

（解説）初夏の到来にはずむ気持を歌った、真っ青な空、新緑が綺麗な香具山、初夏の日差しの中で、真っ白な衣が爽やかな風にひるがえっている様子。

※立体的な風景・色彩の対比・風や光（陽射し）の輝き、神が降り立った山と伝えられる伝説の「香具山」、この国を治める立場から語られている（女性の天恩）。

この和歌のテーマは「大和（奈良県）の国の美しさ」です。なぜ「初夏」を選んだのかに、実はこの作者（持統天皇）の個性の表現の一つ（常識的な美意識・価値観への挑戦）があります。

☆なぜ、作者は「初夏」を選んだのか？ 次の中から一つ選ぼう。

(1) 大和の国は初夏、夏が過ぎやすかったから。

(2) 春と秋こそが美しいというのが当時の常識（美意識）だったから。

(3) たまたま、初夏に衣を干す場面を見てきれいだ感じたから。

3. 古文のわかる読み方！段階的に読み方を身につけていこう！

(1) 声に出して「音読」しよう（古文は主に音読されて伝わった）

★音読するときのポイント！

① 「意味のまとまり」に注意して読もう。

② 「場面構成」、「人物の心情と変化」、「自然や情景など」がわかるように読もう。

③ 「人間関係（だれへの言葉か）」をふまえて読もう。

④ 「動詞・形容詞／助動詞／助詞」をわきまに読もう。

※日本語は「文末」で微妙な心理や考え、相手への配慮を伝えることが特徴です。（英語やフランス語などとは違う構造です）

(2) 「テーマ」を知ってから、自分の立場から読む。

授業の中で取り扱われるのは作品全体の一部です。そのため、作品全体のテーマを知った上で読むと、内容の理解が深まります。（テーマは短くまとめてみたり、先生から教えてもらおう）

(3) 「口語訳」で楽しんで読む。（自分でおもしろさを感じる）

何が、どう書かれているのか、ストーリーや事件（出来事）を楽しく理解しながら読んでみよう。

※「テーマ」と「口語訳」がわかったら終わりではなく、そこからが本当の古文の魅力を発見する学習になります。

(4) 「古文」も「現代文」と同じように読む。

「小説（物語）」・「説明文（記録・報告）」・「随筆」の三つの読み方を知っていると、古文の読み方にも応用できます。

○小説・物語 ……竹取物語（源氏物語）『平家物語』

○説明文・記録・報告 ……「方丈記」（平家物語）『徒然草』

○随筆 ……「枕草子」（徒然草）

※随筆は「小説」と「説明文」を組み合わせたジャンルです。

(5) 「竹取物語」を楽しむためのポイント——8項目！

① 「省略された常識や背景・美意識・価値観」を知る。（先生から）

② 「状況設定」を確かめる。……「初め」と「終わり」を読む

③ 「場面構成と展開」を知る。……事件の数・順序、対比人物・動物

④ 「中心人物の変化（解釈）」：かぐや姫の「初め」と「終わり」

⑤ 「対比的人物の魅力と役割」：中心人物以外の役割と魅力を読む

⑥ 「個性的な表現」……人物描写・自然描写、特徴的な優れた表現

⑦ 「自分の考え」をもつ。……好きな人物・場面・表現などがいる

⑧ 課題や立場から調べて「発表・報告・交流（学び合い）」

（例）永遠へのあこがれかや姫の設定と月への帰還

（例）五人の貴公子の「ワソ」と見做る論理

（例）かぐや姫の賢さと論理的思考力

（例）なぜ、帝には心を許したのか？ 学習するかくや姫

スズキ

竹取物語の「はじめと展開」の場面を讀もう
かぐや姫の正体と優れた表現力！

(はじめ) かぐや姫との出会いの場面

① 今昔昔、竹取の翁といふ者有りけり。野山にまじりて、竹を

取りつ、よろうのことにつかひけり。名をば、讃岐連とな

むひける。

② 竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄

り見るに、箇の中光りたり。見れば、三すばかりなる

人、いと美しくて思たり。

③ 翁言ふやう、「われ翁」とタタと見え竹の中におはするに

て知りぬ。子になり給ふべき人なめり」と、手にうち入れて

家へ持ちて来ぬ。妻の娘に預けて養はす。

④ 美しきこころなりし、いと幼ければ籠に入れて養ふ。

(口語訳)

その昔、竹取の翁といふ人と呼ばれた老人がいた。野山に入

り込んで、竹を取って、いろいろなことに使っていた。

② 昔は、竹の中に、もと光る竹があった。周りには、光る竹が

たくさんあって、竹の間に、一筋だけ光る竹があった。

③ 翁は、竹の翁といふ人と呼ばれた老人がいた。野山に入

り込んで、竹を取って、いろいろなことに使っていた。

④ 美しきこころなりし、いと幼ければ籠に入れて養ふ。

(口語訳)

その昔、竹取の翁といふ人と呼ばれた老人がいた。野山に入

り込んで、竹を取って、いろいろなことに使っていた。

② 昔は、竹の中に、もと光る竹があった。周りには、光る竹が

たくさんあって、竹の間に、一筋だけ光る竹があった。

③ 翁は、竹の翁といふ人と呼ばれた老人がいた。野山に入

り込んで、竹を取って、いろいろなことに使っていた。

④ 美しきこころなりし、いと幼ければ籠に入れて養ふ。

(口語訳)

その昔、竹取の翁といふ人と呼ばれた老人がいた。野山に入

り込んで、竹を取って、いろいろなことに使っていた。

② 昔は、竹の中に、もと光る竹があった。周りには、光る竹が

たくさんあって、竹の間に、一筋だけ光る竹があった。

③ 翁は、竹の翁といふ人と呼ばれた老人がいた。野山に入

り込んで、竹を取って、いろいろなことに使っていた。

④ 美しきこころなりし、いと幼ければ籠に入れて養ふ。

(口語訳)

その昔、竹取の翁といふ人と呼ばれた老人がいた。野山に入

り込んで、竹を取って、いろいろなことに使っていた。

② 昔は、竹の中に、もと光る竹があった。周りには、光る竹が

たくさんあって、竹の間に、一筋だけ光る竹があった。

③ 翁は、竹の翁といふ人と呼ばれた老人がいた。野山に入

り込んで、竹を取って、いろいろなことに使っていた。

④ 美しきこころなりし、いと幼ければ籠に入れて養ふ。

(口語訳)

その昔、竹取の翁といふ人と呼ばれた老人がいた。野山に入

り込んで、竹を取って、いろいろなことに使っていた。

② 昔は、竹の中に、もと光る竹があった。周りには、光る竹が

たくさんあって、竹の間に、一筋だけ光る竹があった。

③ 翁は、竹の翁といふ人と呼ばれた老人がいた。野山に入

り込んで、竹を取って、いろいろなことに使っていた。

④ 美しきこころなりし、いと幼ければ籠に入れて養ふ。

(口語訳)

その昔、竹取の翁といふ人と呼ばれた老人がいた。野山に入

り込んで、竹を取って、いろいろなことに使っていた。

(展開) 月の都の使者（天人）がやってくる場面

かかるほどに、宵（夜）七つ九時、も過ぎて、午前帯

時ころになると、邸の周辺が、真昼よりも明るく、一面に光り

輝いた。その明るさは、満月の十倍ほどで、そこに人間の毛

穴まで見えるくらいだった。

やがて、天人が雲に乗って下りきて、地面から高さおよそ一

五メートルの位置に立ち並んだ。

これを見た邸の内や外にいた全員が、何か怪訝なものに襲わ

れるような気分になり、天人と戦う意欲を失っていた。

ようやく、気力を奮い起して、弓に矢をつがえようとする

けれども、手に力が入らなくなり、体が力が抜けて、ぐんぐん

と物に落ちていった。そのなかで、勇猛心のある武士は、

手足の脱力、感に耐えて、矢を射ようとするけれども、矢は目標

からはずれ、あらぬ方向に飛んでいくので、死力を尽くした合

戦などあるわけがない。兵士たちは、正気を失い、ぼうっとし

た顔つきで天人たちを見つめていた。

(口語訳)

満月の夜、いよいよかぐや姫を迎えに月の都の使者（天人）

がやってくる場面。電気も外灯もない時代、深夜に異様なほど

の明るさ（光輝）の中で月の都の使者（天人たち）が雲に乗っ

て降りてくる様子で語られている。

(1) 「宵のつち過ぎて、子の時はかりに」

・時間帯の変化、様子をあらわす。時刻は午前〇時頃。

(2) 「家のあたり星の明るさを十合はせたるばかりにて」

・真昼の明るさの十倍、異様な明るさのこと。

・「光輝」や、明るさは、人間界を超える世界をあらわす。

(3) 「ある人の毛の穴さへ見ゆるほどなり」

・見ようとして自然と毛の穴さへ、もつと細かいところま

でよく、見えるくらいであるといふこと。

(4) 「地より五尺ばかり上がりたるほどに立ち連ねたり」

・地上より二メートルでは雲が見えないうちに、逆に地上から一

・五メートルで地上の人の視線が変わらない。

・約一五〇センチメートルでは地上の人が聖なる存在を拝み見る

角度として設定されている。

(原文及び口語訳は『竹取物語』全二冊、角川書店、二〇〇一年による)

資料3 「伝統文化」（古文）の授業開発・学習シートー「竹取物語」（小学校編）ー

「古典（古文）」を楽しむ声に出して読もう！
ー「竹取物語」のおもしろさを、古文が楽しくわかる読み方の基礎・基本学習ー

小学五年（六年） 組 番 氏名

※名前は大切な宝物。大きく丁寧に書こう！

長い長い年月をへて、今日まで読みつがれてきた作品のことを「古典」といいます。一〇〇〇年以上も昔から、当時の人々（日本人）はどのようなものを楽しんだり、感じたりしていたのかな？
古文の世界の楽しさや深く深さを知るのは、自分の「言葉の世界を豊かにする」ためにも、これからの「日本人としての生き方」や「自分らしい生き方」を創るためにも大切なことなのです。

ステップ1 「古典は楽しいぞ編ー今と同じ？違う？ 古典クイズー」

1、今から約一〇〇〇年以上も前の日本は「平安時代」と呼ばれていました。
この時代の考え方と今の時代（現代）の考え方を、「古典クイズ」をしながら楽しく学んでいこう。
(1) 女性（姫君）が結こんする年れいはいくさい？
① 八く九さい
② 二く一く三さい
③ 一八く一九さい
④ 二く二く四さい

(2) 平安時代の「美人」の条件は何だったのでしょうか？
① 髪型：長い髪・短い髪
② 髪の色：ちや色・黒色・金色
③ 顔の形：小顔・ふくらつ顔
④ 眼の色：細い・重の眼・ぱっちりした二重の眼
⑤ 唇の色：白くきれいな歯・黒くぬつた歯
⑥ 眉の形：ぼおとした眉・柳型に整えた眉

(3) 「会う（逢う）」（古語）の意味は何でしょうか？
① じつと我まんする
② 男女が結こんする
③ 手紙を出す
④ （相手を）にくむ

2、日本には長い年月をへて、今日まで語りつがれてきた数々の「伝統文化」があります。
現代にも残っている身近な伝統文化（昔話・民話とか、スポーツとか）を、みんなはどれくらい知っているかな？
(1) 昔話「桃太郎」では、桃太郎はどこで見つかった？
① 山おくの寺
② 深い海の底
③ 川に流れてきた
④ 桃林の中
⑤ 梅の木の間

(2) だれが桃太郎を見つけて育てたのか？
① ビカチウとサトシ
② スネ夫とジャイアン
③ しんちゃんときまおくん
④ おじいさんとおばあさん

(4) なぜ、昔話「桃太郎」は「桃」なのか？
「バナナ太郎」とか「メロン太郎」とかじゃ、ダメ？
・ヒント：桃太郎は仲間たちと協力して、最後はどうなったんだった？
① 生まれたときから、桃ばかり食べていたから。
② 桃から生まれた男の子だから。
③ 体から桃のようなあまい（かおり）がしていったから。
④ 桃は悪いものを取り払う不思議な力（盡力）をもっているから。
⑤ 桃は当時よく川に流れていたから。
⑥ 桃は当時の人たちによく食べられていたから。

(5) 現在の「相撲」の形は「平安時代」から始まったと言われています。どうして、力士たちは相撲を取るをまいたりするのかな？
① 相手を戦う前だから、体がうずうずするため。
② 土俵にひそむるものを払い清めるため。
③ ちよつとやそつとじゃ動じないようにするため。
④ 土に塩をたくさまいて、相手を転ばせようとかくらんでいるため。

☆ちよつぷりおまけコーナー
(1) スポーツメーカー「ナイキ」のマークはいつたいどこからきているのでしょうか？
・ヒント：ギリシヤ神話に關係があるよ！

答え 「つばさ」
(NIKEは二ケ、エンジェルの原型)

(2) 「キューピーちゃん」はもとと何でしょうか？
・ヒント：背中にあるものは何かな？

答え 「キュービット」
(ギリシヤ神話における天使)

「竹取物語」って、つまりどんな話なの？
ー竹を取てくらししている お姫様のお話？ー

ステップ2

1、「竹取物語」って、いったいなに？

平安時代前期（九一〇年より前）にできた「日本最古の物語」で、作者は未だにわかっていません。他の名で「かぐや姫の物語」「竹取の翁（おきな）の物語」ともいわれています。
その当時の有名な人である、紫式部は「物語のいではじめの祖（おや）」（源氏物語「絵合」の巻）と、小説としての価値を高く評価しました。

竹取物語……

2、「竹取物語」のストーリー（あらすじ）

月の世界から地上につかわされた「かぐや姫」は、竹取の翁（おきな）と姫（おうな）に大切に育てられた。その後、五人の貴公子（きこうし）と帝（みかど）の結こんのお願いをもすて断り、八月十五日の満月の夜、むかえに來た月の使者とともに月の世界に帰って行く物語。

※「竹取物語」と「ちよと似てゐるな」と思ふ昔話は？
※似ているんだけど……いったいどこが違う？

3、「竹取物語」のテーマは、今でも不明！
いろいろありますが、先生はこのように考えています。（あくまでも一つの見方です）

① 永遠な美しさ（心やたましいの純粋さ）へのあこがれ
② 人間の欲望への批判（中身よりも地位とか名譽・お金などだけが大事という考え方への批判）

※みんなも、「自分なりのテーマ」をぜひ考えてみよう。

ステップ3

かぐや姫はなんのためにやてきたのか？
ー「竹取物語」クイズー

1、かぐや姫は、どこで見つかった？

【人物設定の方法】

(1) かぼちやの中 (2) 岩右の中 (3) ナスの畑
(4) 竹のつつの中 (5) ドラえもんがケツの中
※どうしてこういうところから見つかったのかな？

2、はじめのかぐや姫の大きさは？

【人物のはじめ】

(1) 三〇センチ位 (2) 八〇センチ位 (3) 一〇センチ位
※その後、どのくらい期間で大人（の大きさ）に？

3、「なま竹の」かぐや姫」と名づけられたのは？

【命名と象徴】

(1) 家具をつくるのがうまくて、翁夫婦はおかげでお金持ちになったから。
(2) 光りがややくように美しいから（実際、光が満ちているようだった）。
(3) そのかがやきで悪魔や病気を追い払う、不思議な魔力があったから。
(4) 眼力が強くこの世の女性とは思えない雰囲気から。

4、求こん者の最後に残ったのは「五人の貴公子」。
彼らは「身分（位）」の高い順に現れて、かぐや姫の難題通りにできず、ウソ・ごまかしを見やがれ結こんに失礼するように語られている。次の五人を、登場した順番に「位の高い方から」並べてみよう。
【エピソード・事件の構成】

A 大納言（だいなごん） おおとものみゆき
B くらもちの皇子（みこ）
C 中納言（ちゅうなごん） いそのかみまろたり
D いしつくりの皇子（みこ）
E 右大臣（うだいじん） あべのみうし

5、かぐや姫は、八月十五日（満月の夜）に月の世界に帰らなければならぬ。「月の都の人」と翁に語る。また自分の出生の秘密も語っている。次の中で正しいものを二つ選ぼう。

【人物設定と変化】

(1) 月の世界に本当の両親がいる。
(2) 月の世界ではひとりぼっちである。
(3) 月の世界の記憶はまったくくない。
(4) 月の世界は楽しく自由である。

6、かぐや姫が、地上の竹取の翁のもとにつかわされたのはなぜか？月の都の使者はどう語っているか、次の中から二つ選ぼう。

【因果関係と設定、テーマ】

(1) かぐや姫は月の世界で罪を犯したので、地上につかわされた。
(2) かぐや姫の希望で地上世界を選び、やつてきた。
(3) かぐや姫は地上の人々に美の怖さを伝えるためにつかわされた。
(4) 竹取の翁が竹を毎日取っていて、環境に悪影響を与えるため。
(5) 竹取の翁が善行（ぜんこう／良い行い）を積んだので派遣した。
(6) 竹取の翁が欲望のために大切なものを失うことに気づかせるため。

また、古代歴代天皇で初めて火葬を選んだ持統天皇の「春過ぎて夏来るらし白妙の衣したり天の香具山」（万葉集）では、あえて初夏という季節を選ぶ発想、神が降り立った香具山伝説と結びつけられた場所の選択、立体的空間構成、色彩、風の描写等がポイントである。

(3) 場面、人物・表現・テーマ等と「自分の考え」、音読や報告・紹介等の形で発表（活用型学習。自分の考え・解釈を持ち発表、交流等のモデル学習）

「思考・判断・表現力」等の評価は、習得の正確な理解レベル・自分の生活経験や既習情報との対比・論理的な説明力や語彙力・個性的な着眼点・資料の活用等によって可能である。

(4) 古文の魅力に気づかせ、読み方のモデルを「活用」して口語訳で読ませる。学年や関心にあった図書紹介等（活用型学習。習得から活用へのモデル学習）

(5) 古文特有の絵巻きや図表の構図・描き方の読み方のポイントを教える（習得型・活用型学習。古文特有のモデル学習、情報リテラシーの一環）

5、授業モデル（学び方の「型」）開発の一視点

(1) 伝承物語（民話）の知恵と構成、言葉の魅力

音読や暗唱によって楽しく学び親しみ、そうした学習を主体的な読書意欲や調べ学習等にリンクさせるためには学びのステップが必要である。特に、限られた授業時数で授業化するためには小学校高学年・中学高校への「学びの系統性」という観点から、民話（伝承）、古典・漢文等特有の要素を生かした「授業モデル（学び方の型）」を教える「習得型学習」の開発が大切である。

例えば、「かさこ地蔵」「おおきなかぶ」「三年とうげ」「木陰にごろり」「吉四六話」等の民話（伝承）の授業開発は以下の5つの特質（テキスト形式）を生かした授業化が重要である。なお「スイミー」（レオニ作）も同じ伝承物語の方法・構造による現代物語である。

- ①テーマは人生（民族）の「知恵や勇気・協力、賢さ等（優しさや信仰心等）」であることを教える。
- ②初めと終わりで「中心の出来事」が変化する、その契機（事件・出来事）は1～2つであることを教える（人物が段階的に変化するのは「物語・小説」等）。
- ③ストーリー展開（構成）の工夫・意外な面白さに気づかせる（事件の展開・順序、エピソードの構成）。
- ④言葉の繰り返しやリズムの面白さに気づかせる（伝承文学らしさ、生活・労働、魂のリズム等）。
- ⑤背景になっている知識を教える＝伝統文化に関わる部分、長寿信仰、賢者（少年、老人や知恵有る人）。例えば、「かさこ地蔵」では日本人と地蔵・お正月信仰、お餅（もちこ）にこだわる等の日本の文化の意味を教える。

(2) 『平家物語』・「生の輝き」を語りと描写で

『平家物語』の魅力は「滅ぶ運命にある人間の中の『生の輝き・人間性』」の発見（極限状態の人間性、親子

の情や主従関係の誠実さ、時代を読み誤まることの悲劇等）」がテーマであることが重要である。安易に「無常観」「日本人特有の滅びの美学」と語ると「敗者の記録をなぜ読むのか」と生徒は疑問を持つことがある。

また、緊迫した人間関係、立体的な空間時間描写、行動の意味と解釈等「語りと描写の優れた表現力」が重要な指導事項である。語りの部分と会話・行動描写の読み方は小説・物語や随筆の読み方の技術と重なるので、それを生かした授業化、読み方を教え「自分の観点から考えを持たせる」学習が有効である（注8）。

まとめにかえて

一言語技術と「伝統的な言語文化」の教育—

小学校6年、中学校3年の各最終学年ではそれぞれの授業目標が「昔の人のものの見方や感じ方を知ること」（小6）、「古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと」（中3）等と記されている。しかし、「知る」「簡単な文章を書く」（「親しませる」）だけで終わってしまっているのか。学力や態度・意欲等の評価の扱い、教師の授業力の評価・改善等が小中学校における系統的指導、教育の公的責任の観点からも重要である。

古典教材による学習を通して、児童生徒達が学ぶ楽しさや意義を自覚し現代につながる普遍的な価値観を発見し、自分の生き方や考え方・感じ方を見直すことができること（学力育成と人間性・感性や価値観育成）につながる古典指導を開発していく必要がある。

そのためには、これからの国語科授業では以下に示すような観点からの授業・評価開発が求められる。巨視的な言い方をすれば、これらは戦後授業研究（評価）論の再構築の一環ということができると考えている。

(1) 古典の楽しさ・学ぶ意味を「全員に楽しく」

古文・漢文を読む楽しさと魅力、学び方の基礎・基本（習得型学力）を全員に楽しく教える。「自分の考え・解釈」を持つ技術、言語化し伝えるために「書く、まとめる、引用、要約、考察」できる学力を育てる。

(2) 「伝統的な言語文化」における言語力の位置

〔伝統的な言語文化と国語に関する事項〕の授業と到達目標・評価基準としての「言語技術」の関係を明確にする。古典教材の読解や解釈（活動）に終始せず、古典を味わいながら論理的に「読み解く」「自分の立場から書く・まとめる」「発信・交流」できる言語力、読書力・批評能力等の育成が必要である。

(3) 3領域と「伝統文化」でつける学力、相互性

古典＝文学教材指導という常識的観念があるが、「テキスト形式」（表）で示したように論理的な文章の技術（言語技術）による古典教材も多いのが実情である。例えば、日記・伝記・記録・歴史等の教材である。

「話す・聞く」「読む」「書く」学力育成の3領域で指

導評価すべき学力と「伝統的な言語文化と国語に関する事項」での相互関連や重なりを明確にした、系統的な授業構想が必要となる。

(4) 習得型学力（基礎・基本）から活用型学力につながる「学びの系統性」「授業構想」の明確化

「伝統的な言語文化と国語に関する事項」の授業化での「習得型学力（基礎・基本）」とはどんな学力や学習なのか、活用とはどうなればいいのかという観点からの段階的な指導過程・単元構成論の提案が必要である。

(5) 教材における「テキスト（表現）形式」の特性を踏まえた具体的な授業技術・指導過程論等の提案

「3」の観点と重なるが特に、古典各ジャンル固有の特質・表現構造を踏まえながら、国語科における文学教材（詩歌・民話・物語・小説教材等）・説明文（論説・評論・批評等）・伝記（記録）・随筆教材等の学習との関連や重なりと古文・漢文固有な要素の整理等が求められる。「テキスト形式」（表）はこうした新しい指導論を拓くためのステップ（試案）である。

稿者はこれまでも「竹取物語」「枕草子」「平家物語」等を扱った授業（中学生対象）や模擬授業を交えた講演等を行ってきた（注9）。今後はより具体的で系統的な各教材毎の「授業モデル」「段階的な学習シート」等の開発、小中（高校）における実践による検証を通じて提案していく予定である。

注記

- 1、「小学校学習指導要領解説 国語編」（文部科学省2008年8月）、『平成19年度文部科学白書』（同2008年4月）、『中央教育審議会一審議のまとめ』（2007年11月7日）、『小学校・中学校学習指導要領解説国語編』（同2008年8月）等。
- 2、市川昭午『教育基本法改正論争史』（教育開発研究所2009年）、『教育基本法改正案を問う（教育学関連15学会）』（学文社2006年）、『新・教育基本法改正案を問う（同15学会）』（同2007年）、藤田典典他編『なぜ変える？教育基本法』（岩波書店2007年）、『2008年度版学習指導要領を読む視点』（白澤社発行・現代書館発売2008年）等。
- 3、佐藤洋一「戦後教育は終わった—伝統的な言語文化重視—特集・戦後の「教育論争」から何を学ぶか—」『現代教育科学 2011年11月号』（明治図書）。
- 4、松本健一・竹内修司他『占領下日本』（筑摩書房2008年）、菱村幸彦著『戦後教育はなぜ紛糾したか』（教育開発研究所2010年）、藤原正彦著『日本人の誇り』（文春新書2011年）、秋尾沙戸子著『ワシントンハイツ・GHQが東京に刻んだ戦後』（新潮社2009年）、浜野保樹『偽りの民主主義』（角川書店2009年）等。
- 5、佐藤洋一編著『国語科「習得・活用型学力」の開発と授業モデル1〜4』（明治図書2011年10月）。
- 6、左近妙子「昔話・神話・民話の読み聞かせ—古典の読み聞かせ6ポイント—」『国語教育2011年1月号 特集古典で身に付けさせたい国語学力』（明治図書）。
- 7、音読・朗読の指導と評価にはレベル・段階があるが混乱したまま活動に流れている実践が依然多い。言語力・評価基準を

明確にして、解釈・音読のレベル（段階）を考えることが重要である。(1) 声に出す音声化レベル（姿勢態度、口形、音量、本の持ち方など）、(2) 正確に読むレベル（場面や段落の意味のまとまり、内容理解、速さ、読み間違いなくすらすらと等）、(3) 解釈の音声化表現レベル。特に間の取り方と主要概念やキーワード、人物像や描写などの読み方＝授業モデルの習得の活用）、(4) 朗読・群読は個性的（芸術的）な表現技術であり「習得・活用」の学習や評価にはなじまないと考えられる。

- 8、蔭山江梨子「日本文化・思考の型を楽しく—『平家物語』「扇の的」を例に—」（注6に同じ）、他に上横手雅敬『平家物語の虚構と真実（上下）』（はなわ新書1985年）等。
- 9、「楽しくわかる古典の学習」（愛知県東海市立富木島中学校2年4組で実践、2008年10月30日）等。

主な参考文献

- 1、教科教育百年史編集委員会編『原点对訳米国教育使節団報告書』（建帛社1985年）、教育基本法研究会編著『逐条解説改正教育基本法』（第一法規2007年）、日本教育方法学会編『日本の授業研究（上下）』（学文社2009年）等。
- 2、ハルオ・シラネ他編『創作された古典』（新曜社1999年）、中村真一郎『王朝物語』（新潮社1998年）同『源氏物語の世界』（新潮社1971年）同『色好みの構造』（岩波書店1985年）、渡辺実『平安朝文章史』（筑摩書房2000年）同『枕草子』（岩波書店1992年）、山口仲美『日本語の古典』（同2011年）、西郷竹彦『増補合本 名句の美学』（黎明書房2010年）等。
- 3、石川九楊『「二重言語国家・日本」の歴史』（青灯社2005年）、井上ひさし『日本語教室』（新潮社2011年）、小長谷有紀編『「おおきなかぶ」はなぜ抜けた？』（講談社2006年）、小森茂『なぜ「言語活動の充実」なのか』（明治図書2011年）、難波博孝『母国語教育という思想』（世界思想社2008年）、ゼックミスタ他『クリティカルシンキング（上下）』（北大路書房1996年）、『芸術新潮2011年9月号 特集・ニッポンの「かわいさ」』（新潮社2011年）等。
- 4、日本言語技術教育学会編『「伝統的な言語文化」を活かす言語技術』『言語技術教育18』（明治図書2009年）同編『「伝統的な言語文化」を深める言語技術』『言語技術教育19』（同2010年）、『国語教育2008年12月号 特集「伝統的な言語文化」の授業づくり』（同2008年）、市毛勝雄編『「伝統的な言語文化」を教える1〜3』（同2009年）、大森修編『楽しい伝統的な言語文化の授業づくり（1〜6年）』（同2009年）、全国漢文教育学会・謡口他編『漢詩・漢文なるほどエピソード&ゲーム集』（同2006年）、石塚修『小学校・知っておきたい古典名作ライブラリー32選』（同2009年）、有田和正編『社会科で育てる新しい学力2 伝統・文化の継承と発展』（同2008年）、田中洋一編著『国語力を高める言語活動の新展開＜伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項＞編』（東洋館出版社2009年）、大熊徹他編『小学校国語「伝統的な言語文化」の授業ガイド』（同2009年）、中村哲編『伝統や文化に関する教育の充実』（教育開発研究所2009年）、人間教育研究協議会編『教育フォーラム42 伝統・文化の教育』（金子書房2008年）等。

（2011年9月16日受理）